

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Lower respiratory tract infections and orofacial clefts: a prospective cohort study from the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: 口唇口蓋裂と下気道感染症の関連の研究

ユニットセンター(UC)等名: 北海道UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Epidemiology

年: 2021 月: 1 巻: 頁:

筆頭著者名: 佐藤遊洋

所属UC名: 北海道UC

目的:

本研究では口唇口蓋裂を裂型に従って分類し、口唇裂と口蓋裂を有していた子供、口唇裂のみを有していた子供、口蓋裂のみを有していた子供と生後1歳までの下気道感染症の発症との関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

調査に参加した81,535名の母親と子供が統計解析に含まれた。そのうち、口唇裂と口蓋裂を有していた子供は67名、口唇裂のみを有していた子供は49名、口蓋裂のみを有していた子供は36名であった。これらの口唇口蓋裂の有無を独立変数とし、母親が報告した生後1歳までの下気道感染症発症の既往歴を従属変数とした。

結果:

対照群と比較して、口唇裂と口蓋裂を有していた子供と口唇裂のみを有していた子供の下気道感染症の発症リスクは統計学的に有意に高くなっていた(口唇裂と口蓋裂を有していた子供のリスク=2.38倍、口唇裂のみを有していた子供のリスク=2.73倍)。口蓋裂のみを有していた子供は下気道感染症の発症リスクと統計学的に有意に関連していなかった(1.08倍)。

考察:(研究の限界を含める)

本研究はいくつかの制限を有している。1つ目は、下気道感染症の発生が母親による報告によって定義されていたことである。2つ目は、口唇口蓋裂について重症度などのより詳細な情報がなかったことである。3つ目は、下気道感染症の発症に関連する誤嚥や嚥下機能の情報がなかったことである。

結論:

口唇裂と口蓋裂を有していた子供と口唇裂のみを有していた子供は、1歳までの下気道感染症発症リスクと関連していた。しかし、口蓋裂のみを有していた子供は下気道感染症発症リスクと関連していなかった。